

キャンパスライフ ～夏休みの過ごし方～

細川正義

私は大学を卒業してすでに40年近く経過している。しかし、大学時代の生活は妙に生々しく記憶している。入学直後の中央芝生での友人たちとの語りから、大学紛争のさなか自分たちが今何をなすべきかを必死で語り合ったクラス討論のとき、考えることに倦んで数名の友人とぶらりと旅した北海道で眼にした風景、毎夏に行った書道部の合宿での猛練習と友人と抜け出して夜を徹して人生を語り合った記憶、総て懐かしい思い出と、その総てにああすればもっとよかったと思う悔恨の思い。「されどわれらが日々」(柴田翔)「青春の蹉跎」(石川達三)などに自己投影させながら夢中で読んだ記憶も懐かしい。

その学生時代の記憶の中でも「夏休み」のことは更に鮮明に記憶している。下宿生活だった私がはじめてアルバイトを経験したのも1年生の夏休みだった。級友の兄が所長のダンボール会社で過ごした1ヶ月は初めての社会体験であり、初めての給料だった。毎日ダンボールの大きな束を運ぶ重労働だったが、我慢を重ねて乗り越えたこと、思いがけない様々な人間関係を経験して感動することもしばしばあったこと、今はこのひと夏の体験が自分の青春の方向を定めたとさえ思っている。2年生からの夏休みは百貨店の筆耕のアルバイトに専念した。アルバイトをして手にした給料で旅をする、それがメインの学生時代の「夏休み」だったが、年としての「夏休み」が自己形成の大きな栄養源であったことは確信している。しかしここでも不完全燃焼の悔恨はついてくる。

その第一は、恐らく「夏休み」の時間のなかに「大学」と自分のつながりを生活化し確認する認識が不足していたことにあると思う。今、「夏休み」を過ごす学生を見守る立場に立つようになって、そのことを強く思うようになっていく。開放感「大学」の束縛からも離れてと考えた要素が多かったように今は振り返っている。キャンパスに戻り、図書館で過ごす時間をもっと大事にすればよかった、学ぶことと考えることにもっと時間を割くべきだったと後悔している。

学生たちに勧めたいのは、「夏休み」だからできる自己探求を「学生」である特権と責任をしっかりと自覚して有意義に過ごしてほしいことである。

(文学部教授・副学長)